『千葉大学　ユーラシア言語文化論集』14（2012）：63－95

内モンゴル・ホルチン地方のブォ（シャマン）のイニシエーション
―「ダバ・ダバホ」（試練を通る）について―

サランゴワ

キーワード　シャマニズムの再活性化、「ダバ・ダバホ」、「ホス・ダバ」、「イスン・ダバ」、「イスン・ダバン・フルグ」、「ホス・ダバ・ダバホ」儀式の復活

はじめに

現在、ホルチン地方[1]では、シャマニズムが再活性化されており、その特徴を挙げると、①新米ブォ（シャマン）[2]が増加、特に女性ブォが増加。②ブォの治療を求めるクライアントが増加。③供犠祭祀儀礼の復活と増加。④ブォの守護霊の多様化。⑤シャマンのイニシエーションである「ホス・ダバ・ダバホ」（2 つの試練を通る）儀式の復活とその増加である。1950 年代以前、「ホス・ダバ・ダバホ」儀式は、師匠の下で行われ、師匠と家族にブォとして認めてもらう特徴を帯びる。「イスン・ダバ・ダバホ」（9 つの試練を通る）儀式は、新米ブォが社会的に承認されるための儀式であった。「イスン・ダバン・フルグ」（9 つの試練を通る絵）は、ホルチン地方のシャマニズムの世界観と 9 つの試練を通る内容が描かれたもので、ホルチン・ブォの間で非常に重要視されていた。しかし、1950 年代以降、それが見られなくなった。現地調査で、筆者がその写しと出会う機会に恵まれ、9 つの試練を通った経験をもつ老ブォに説明をしてもらった。近年復活している 2 つの試練を通る儀式は、かつての 9 つの試練を通る儀式の機能を発揮しており、新米ブォの増加、伝統文化の伝承に貢献している。

1. ブォのイニシエーションの「ダバ・ダバホ」儀式の復活

ホルチン地方のシャマニズム再活性化の 1 つ注目すべき内容は、ブォのイニシエーション―「ダバ・ダバホ」（試練を通る）儀式の復活である。1950 年代以降、中断されていた儀式の一部を 1999 年に今は亡きホブル[3]（1928-2007）・ブォが復活させた。復活しつつある「ダバ・ダバホ」儀式を紹介する前に、1950 年代までに行われていた「ダバ・ダバホ」儀式について、先学の記録を参考しながら、筆者の聞き取り調査で得た資料を基に紹介する。まず、用語だが、「ダバ」とは、「峠、坂」で、

---

[1] ホルチン（科爾沁）地方とは、内蒙古（以下、内モンゴル）の通遼市とヒッアン（興安盟）を含む内モンゴル東部地域を指す。本論では主に通遼市の事例を取り上げる。
[2] ホルチン地方で、ブォ(buu)という語は、男性シャマンを指し、また、シャマンの総称でもある。本稿では、ホルチン地方のシャマンをブォと記す。
[3]本稿においては、ブォの名前をすべて仮名にする。

「ダバホ」は、「通る、乗り越える」である。「ダバ」は、また、日常生活の中で、「難問、難関」を象徴し、新米ブォのイニシエーションでは、「試練」を意味する。1 つの試練は、1 つのダバである。「ダバ・ダバホ」を本稿では、「試練を通る」と訳す。1950 年代まで、ホルチン地方で、「ホス・ダバ」（2 つの試練）、「ドロン・ダバ」（7 つの試練）、そして、最高の「イスン・ダバ」（9 つの試練）を通る儀式が行われていた。「イスン・ダバ・ダバホ」（9 つの試練を通る）儀式は、最も有名である。それは、9 つの試練があり、1 つの試練を 9 回繰り返し行う。

通常の場合、「ホス・ダバ」は、弟子ブォが師匠の家で行う。その内容は、押し切り（草を切る刃物）の上を歩く、火に入れて真っ赤になった犂の上を歩くことである。それを通ることで、師匠と家族にブォとして承認してもらっていた。「ドロン・ダバ」（7 つの試練）は、数人のブォが弟子を集めて行った。「イスン・ダバ」（9 つの試練）は、いくつかの村の新米ブォを集めて行われるので、周辺の村の人々にとって、盛大な祭典だった。かつて、新米ブォは、「イスン・ダバ・ダバホ」（9 つの試練を通る）ことで力を強め、1 人前のブォとして承認された。その意味で、「ダバ・ダバホ」（試練を通る）儀式は、普通の人間から、ブォとして再誕する再生儀礼である。また、1 人前のブォでも、機会があれば、「ダバ・ダバホ」儀式に参加すればするほど、力が強くなると言われる。2007 年 8 月、通遼市ホルチン左翼中旗 CHE 村の 7、80 代の数人の老人にインタビューすると、1950 年代まで次の言い回しがあったという。

「『イスン・ダバ』を通らないと本物のブォではない」、「『イスン・ダバ』を通らないとブォと認めない。高僧にならないとラマと認めない。名射手にならないと盗賊と認めない。排長（小隊長）にならないと兵士と認めない」[4]。

また、「『イスン・ダバ』を通らないと、重い病気（強い悪霊）を治療することができない」とも言い、ブォが「イスン・ダバ」（9 つの試練）を通ることは、当時、ブォを社会的に 1 人前のブォとして認めるか否かの 1 つの基準となっていたことが伺える。しかし、老ブォ自身は、この意見に必ずしも同意していない。ホルチン左翼中旗在住のムンヘナソン（1927－）・ブォとイテゲル（1928－）・ブォは、「守護霊が強ければ『イスン・ダバ』を通らなくても、重い病気を治療することができる」と語った。これは、あくまでも、ブォの中心的な役目は病気治療なので、それを前提に考えているが、この意見に同意する老ブォもいる。フレ旗在住のラシ（1926－2009）・ホンダン（シャマンの一種）は、「巫病の時、草を切る刀の刃に飛び上がって遊んでいたことは、ある意味で試練を通ったことになる。普通の人には考えられない」と語った。本人の思いでは、正式に試練を通ってはいないが、試練を通

[4] この言い回しは当時の社会状況を反映している。新中国建国以前、ホルチン地方に、「ホンフス・デールム」（フンフスは、中国語の〔紅胡子〕即ち、赤い髭で、単独でも盗賊を指す。デールムは盗賊の意）と呼ばれる盗賊が横行していた。80 歳以上の人は、それに関するエピソードをすぐにも語りだせるほどである。たとえば、1931 年 6 月末から 8 月末までシリンゴル草原を横断して通遼へ目指す江上波夫が現地の人に開魯、通遼一帯で土匪が横行してすこぶる危険であることを教えられている[江上　1997：194-195]。

る技をすでに披露したことを、試練を通ったことと同じように理解しているのである。ラシ・ホンダンをインタビューする際、以前ラシ・ホンダンと同じ村に住んでいた男性（1940 年生、農民）に道案内をしてもらった。彼は、「このバッシ（先生、尊敬語）は、革命（土地改革、文化大革命）の関係で通ることができなかったが、やろうと思えば、容易にできる」とラシ・ホンダンの霊力を評価した。

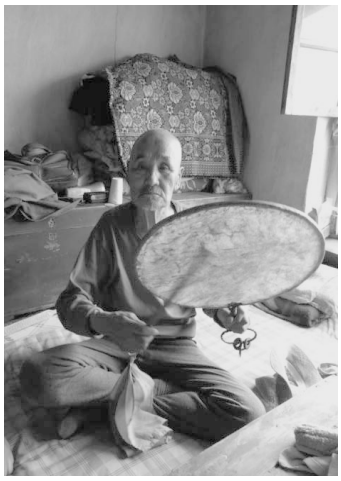

写真 1（左）　盛装して、祭壇の前に立つホブル・ブォ（2006 年月）

写真 2（中）　娘が刺しゅうを施してくれた治療道具入れを手に持つムンヘナソン・ブ（2007 年 9 月）

写真 3（右）　自宅の南側のオンドルに胡坐をかいて坐り、太鼓をもつイテゲル・ブォ（2011 年 8 月）

写真 4

ラシ・ホンダン夫婦（2007 年 8 月）

ラシ・ホンダンのモンゴル服は、快癒したクライアントが恩返しとして献上したもので、その妻のモンゴル服は孫娘（1972 年生）にプレゼントされたものである。

2. ホルチン地方のブォのイニシエーション―「イスン・ダバ・ダバホ」儀式の内容

次に、1950 年代まで行われていた、「イスン・ダバ・ダバホ」を通る儀式の内容を紹介する。地域によって、その内容が多少異なる。ホルチン左翼中旗在住で、「イスン・ダバ」（9 つの試練）を通った経験があるイテゲル・ブォは次のように示した。

① 子宮（サバン）のダバ。2 人が両手で 2 本の棒を横に持ち上げて体を 9 回回転させる。「サバ」

は、「子宮」である。したがって、「サバン・ダバ」は、「子宮の試練」である。ブォとして生まれ変わることを象徴している。2 人が横に持ち上げた樹の棒は子宮で、体を回転させる行為は、母親が分娩するときの胎児の動きを思い起こさせる。イテゲル・ブォによれば、この試練（ダバ）が最初に行われるという。「サバン・ダバ」を「母なるダバ」とも称し、このことも「サバン・ダバ」の象徴的な意味を裏付けている。

地域によって、子宮のダバは、また、柳（ボルガス）を通る試練が行われることがある。やり方としては、2 人の人が柳を持って、約 1ｍ離れて立つ。新米ブォが走りながらすり抜ける。それを 9 回繰り返す。もし、柳や人にぶつかると失敗になる。これは、ブォとして再生することを表現し、象徴的な意義は、「子宮のダバ」と同じである。

② 火のダバ。杏樹[5]の根の燃える 9 つの火の上を歩く。ホルチン地方で、かつて、霊力が強いブォが火の中に入って、出て来た時、髭が凍っていた。また、火を素足で踏み消すこともあったと伝えられている。

③ 鏝のダバ。灼熱した鏝を 9 回噛み、舐める。

④ 針のダバ。針か釘を新しいフェルトに隙間なく立て、上を素肌で 9 回転がる。このダバをまた、「シルヘン・ダバ」とも言う。「シルヘ」は布を構成する織目を指す。「シルヘ＋ン」は、「織目の」の意。針の細さにちなんで与えた名前である。

⑤ 油のダバ。9 つの鍋に油を注いで沸かして、手を入れて古銭あるいは針を 1 個ずつ取り出す。また、湯を沸かして古銭あるいは針を 1 個ずつ摘みあげる。

⑥ 犂のダバ。犂を火に入れて真っ赤となったら、新米ブォは足の裏に油を塗り、その上を 9 回踏む。調査地の実見したことがある老人（1936 年生）が、「犂の上を歩くと、足跡が黒くなった」と語った。灼熱の鉄の上に水をこぼすと黒くなる。このように考えると、火の熱さを冷やす霊力を表現している。

⑦ 潜りのダバ。木の枝を丸めて半円形にして、3 本か 9 本の長い刃物をそこに縛っておく。その下を 9 回潜り抜ける。

⑧ 鎖のダバ、線のダバとも言われる。鎖を体に巻いて、タルニ（呪文）の力で解く。これを 9 回繰り返す。

地域によって、鎖で体を巻くダバの代わりに、「2 種類に編まれた 9 本の紐で体を縛り、それを呪文の力で解く。「李亮[6]ブォの『イスン・ダバン・フルグ』(9 つの試練の絵）には、この荒行が描かれ

---

[5] 1970 年代までにホルチン地方の多くのところで野生の杏樹が自生していた。秋になると家庭で杏の実で油を搾ったり、実を売って換金したりした。普通の樹と比べて、杏樹の根の火力が強く、硬く、火が長持ちするので、冬になると根で家を温める好材料とされた。ブォたちはその火の強さと硬さを好んで食べたという。

[6] 19 世紀から 20 世紀初期までホルチン左翼中旗に活躍した有名なブォ。

ていない」[白翠英　1998：242]という。

⑨　刀の梯子のダバ。これは、「イスン・ダバ」の最後に行われる項目である。9 段の梯子の上にジャドゥ（草切り用の長い刀）の刃を上向きに縛り、その上に登る。梯子は 2 つの棒を立たせて作ることがあるが、馬車の輪を取り外して、車を上向けに立たて、草切り用の長い刀を縛って梯子にすることもある。

以上、かつて行われていた「イスン・ダバ・ダバホ」儀式の内容を紹介した。ホルチン地方のシャマンのイニシエーションの「ホス・ダバ・ダバホ」（2 つの試練）儀式と「イスン・ダバ・ダバホ」（9 つの試練を通る）儀式の内容からみると鉄、火、熱さが特徴である。鍛冶屋の「火を支配する」力とシャマンの「火を統御する力」が類似する。したがって、熱くした犂の上を歩き、熱くした鏝を噛み、舐めることがまさにブォの火を統御する力を誇示している。それができることは、普通の人間からシャマンとして再誕することを表現している。

筆者が、「イスン・ダバ」を通ったと語る、3 人のブォに会っている。1 人は、ホブル・ブォで、もう 1 人は、イテゲル・ブォ、そして、ブレンテグス（1923 - 2009）・ブォで、3 人ともホルチン左翼中旗在住者である。ホブル・ブォに「イスン・ダバ・ダバホ」についてインタビューしたのは、2006 年 9 月である。イテゲル・ブォには、2006 年 8 月と 2007 年 8 月である。2 回目の時、イテゲル・ブォの家から、1.5Km 離れた HA 村に住む翡翠（1966 年生）ブォ夫婦が同行してくれた。そして、ブレンテグス・ブォから話を聞いたのは 2007 年 5 月と 8 月である。

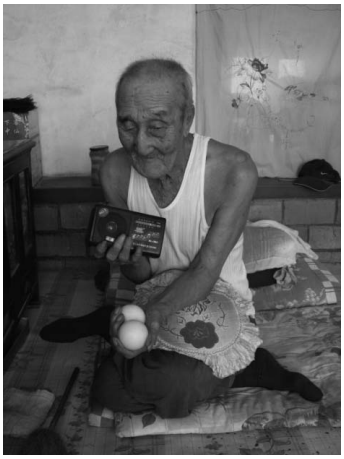

写真 5（左）ラジオでホーリン・ウリゲル（四胡を弾きながら物語を説唱する芸）を聴いているブレンテグス・ブォ（2008 年 9 月）。

写真 6（右）盛装した翡翠ブォが、師匠の包月季ブォ（1968 年生、女性、農民）の家にて（2007 年 9 月）。

ホブルとイテゲル・ブォは、それぞれ、1941 年、1945 年に「イスン・ダバ」を通った。次に当時の状況を少し紹介する。イテゲル・ブォによれば、1945 年、17 歳だったその年に、ホルチン左翼中旗のネルト・ホショという村の野外に式場を設けて行われた。イテゲル・ブォは最年少だった。2 番目の年少者は、20 歳だったガダ・ブォと言う。イテゲル・ブォの記憶では、1945 年以降、「イスン・ダバ・ダバホ」儀式をホルチン左翼中旗では、行われていない。当時、参加したブォは 20 数人だった。覚えているブォの名前は次のようである。テムル、ウリジバヤル、ガダ、ボルショブである。現在、イテゲル・ブォだけは健在である。

「イスン・ダバ・ダバホ」儀式を開催する時期は、晩夏初秋にあたる旧暦の 7 月であった。なぜこの時期かというと、この時期は、モンゴル人にとって 5 種類の宝物の家畜（馬、羊、山羊、駱駝、牛）が肥えて、よく育つときである。また、人間と神々、守護霊とコミュニケーションを取るめでたい時期とされる。イテゲル・ブォによると、「イスン・ダバ・ダバホ」儀式を行う場所は、村から少し離れた野原で台を設けて行う。儀式のため、「イスン・ダバ」の内容を大きく描いた「イスン・ダバン・フルグ」（9 つの試練を通る絵）を会場に飾っておくのが、しきたりだったが、当時、理由は不明だが、絵師が見つからなかったので描かなかったという。「イスン・ダバ・ダバホ」儀式の会場で「イスン・ダバン・フルグ」を展示することがチベットのショトン（夏安居）祭りの際、大タンカ（チベット仏画）を開帳することを思い起こさせる。

儀式に参加するブォは 22 日間、家に帰ってはいけない。みな会場に寝泊まりする。すなわち、この時期は、「分離」の時期である。22 日間練習して、23 日目が本番である。1 つのダバ（試練）を 9 回行うため、9 かける 9、合計 81 回行われた。儀式に参加するブォ、特に新米ブォは、「ダバン・シュース」、つまり、「試練を通るための供犠」を捧げる。周辺の村々の住民は、進んで牛や羊を提供する。そして、近隣の村はもちろん、3、40km 離れた村からも見物者がやってくるという。供犠を屠殺して、「ダバン・エジド」（「ダバン・バッシ」とも呼ぶ）、すなわち、儀式を見守ってくれる神々、守護霊たちに捧げ、周辺の村の人々と共食を行う。「ダバン・バッシ」（試練の先生）[7]と呼ばれる数人の霊力の強い現役のブォが儀式を監督し、儀式を行う際、新米ブォの師匠も参加する。イテゲル・ブォの師匠は、オットハンと言い、ブォとしての霊力が強いため、儀式の監督の 1 人であった。オットハン・ブォ本人も「イスン・ダバ」をいくども通った。その師匠は、「イスン・ダバン・フルグ」を所持していたが、1960 年代に無くしてしまった。現在、オットハン・ブォの霊が孫娘に憑いている。イテゲル・ブォによれば、現場では、「ダバン・バッシ」の役割は非常に重要という。1980 年代に、ホルチン地方で調査を行った内モンゴル師範大学の教授マンサンも「イスン・ダバ・ダバホ」儀式でダバン・バッシの役割の重要さを指摘し、儀式の全面的な責任者であると述べた[マンサン　1990：

[7] ダバン・バッシに 2 種類がある。一つは、霊界にいる儀式を守護する守護霊たちで、ダバン・エジド（主）とも呼ばれる。もう一つは、儀式の現場に監督役を務める力強いブォを指す。

41]。

儀式に参加する際、ブォの帽子を被り、アラグ・デール（シャマン服）を着る。ダバを通る際、それぞれの試練を9回繰り返す。たとえば、9箇所に杏樹の根をオボー[8]のように集めて火をつける。ズボンを膝まで捲って、人より高く燃える火の中に入る。イテゲル・ブォがここまで語ると、翡翠ブォが、「火の中に入って、出てくるとき、髭に氷がついて出て来るブォもいたそうですね」と聞いた内容を確かめようとした。イテゲル・ブォは頷きながら、「火のダバと刀の梯子のダバは恐ろしいものです。もし守護霊の力がなければ、衣服がすぐ燃えてしまうでしょう」と説明した。イテゲル・ブォの印象に強く残っているのは、「油のダバ」で、煮えたぎった麻の油に手を入れて、針を1本ずつ9回取り出すことである。また、熱湯の中からも針を1本ずつ取り出す。これを「水のダバ」と言われる。イテゲル・ブォにとって、灼熱の鏝を口に噛み、舌で舐めるのは、容易なことであった。

ブレンテグス・ブォによれば、「刀の梯子のダバ」で、頂上に登った後、「南西と北東の2つの方向へ降りる。南西の方向に降りるのは、白い方向のブォ[9]となり、北東の方向に降りるのは、黒い方向のブォとなるという。月亮（1954年生、女性、農民）ブォによると、新米ブォが頂上に登ったら、「ダバン・バッシ」（監督者）から「南西の方向に何を見えたか」と質問する。智慧がないブォが「驢馬が見えた」と答えると、黒い方向のブォと認定して北東の方向へ降ろし、智慧があるブォが「ビスマン・チャガン・テングリ[10]が見えた」と答えると、白い方向のブォと認定して、南西の方向へ降りるよう指示するという。しかし、これは伝承か事実かは不明である。だが、ここで重要なのは、白い方向のブォは、西の方向を、黒い方向のブォは、東の方向を信仰することを示している。また、南西の方向に「驢馬が見えた」という黒い方向のブォの返答は、仏教が重視する西の方向に対する軽視を表現しているではないかと思われる。亡きエルデニオソル（1918－2002）・ブォの娘のメデッマ（1944年生、農民）によると、新ブォが刀の梯子に登る際、ダバン・バッシが梯子のそばに立って梯子に酒を吹きかける。その後に登ると足が全く痛むことがなく、怪我もしない。頂上に登ったら、そこに布で被せてある牛乳、動物の生血、炭など9種類のものから一種だけを取り出す。牛乳を取ると白い方向のブォと認められて、南西方向に向かって敷いている白い布に降る。炭を取ると黒い方向のブォと認められて、北東の方向に向かって敷いている黒い布に降りるという。ブレンテグス・ブォによると、

---

8 「土地の住民の保護者たる所の神霊および土と水との龍の在住処として、且つこれらの諸神に供する献祭の場所として建設せられる。オボーの場所としてはその位置が快適で、雄大なまた高い山地の草と水とに富める場所を選ぶ」[バンザロフ　1971：25]。オボーは、石や土、木を拾い集めて積み重ねてできる。ここでその大きさと形を喩えた。

9 ホルチン地方で、基本的に2種類の方向のブォがおり、1つは仏教に帰依した白い方向のブォで、もう一つは仏教を拒否した黒い方向のブォである。前者はチベット仏教の仏を祀るに対して後者はそうしない。ブォが死に、後継者の守護霊となった場合、生前の方向によって、現役（後継者）ブォの方向が決められる。現在、守護霊が生前黒い方向のブォだったとしても仏を祀るブォが増えている。

10 仏教の毘沙門天で、ホルチン地方では豊かをもたらす仏として祭祀する。

梯子の頂上に登ると、そこにすでに立っているダバン・バッシが、刀を新米ブォの口に横に載せ、剣を口に挿し入れる。そして、「悪いことをすると剣と刀に刺されて死ぬ」と誓わせる。すなわち、民衆の利益のため力を尽くすことを根本として考えている。ブレンテグス・ブォによれば、1923 年生まれのブレンテグス・ブォは、1942 年にフフルという村で「イスン・ダバ」(9 つの試練) を通った。当時 20 近くのブォが集まって来たが、本番に参加したのは 7 人だけで、他は途中で逃げ、刀の梯子に登る際、手と足から血が出たが、降りてくるとダバン・バッシがすぐ治療してくれたという。ブレンテグス・ブォの亡き甥の妻のフイレ（1939 年生、農民）によると、同村のある人の父親が 1940 年代初期に具体的にどこかは不明だが、「イスン・ダバ・ダバホ」儀式に参加して、刀の梯子に登る途中、脚に深い傷を負わせしまい、ダバン・バッシが治療したがすぐ治らなかったため、途中でやめたそうである。メデッマ、ブレンテグス、フイレのそれぞれの語りから「イスン・ダバ・ダバホ」儀式のプロセスの中で、守護霊の守護を受けるほか、ダバン・バッシの重要性が分かる。これもイテゲル・ブォが上述したように、ダバン・バッシの役割が重要であると語ることと一致する。ダバン・バッシの霊力の強さが参加者の安全性を左右していると言えよう。

写真 7（右）守護霊が降臨してトランス中の天亮ブォ。5、6 本のたばこの火のついたところを口にして吸っている。

写真 8（左）ブレンテグス・ブォの亡き甥の妻のフイレとその孫。

エリアーデによれば、「シャーマンが儀礼用の木を登るのが、実際には世界木を登っており、最高の天上界の頂上に達するのと同じである」[エリアーデ　1974b : 345]。また、橋、柱、梯子を使って、天上界の上昇、天地間の交通、あの世への到達、魂を送り届ける神話や儀式は世界的に広く見られる[エリアーデ　1974b : 613-621]。刀の梯子の最高段に登って仏教の仏、神々などを見えたと語ることはまさにそれを表現し、弟子ブォは守護霊の力で危険を乗り越えて、霊界の神々と接し、交通することができ、それによって、霊界の神々と人間の仲介役を果たすブォという新たな存在として再生する。

ホルチン・ブォのイニシエーションである「イスン・ダバ・ダバホ」儀式と類似する事例がホルチン・モンゴル人と近接する満洲族とシベ族にも見られる。両民族に「刀の梯子」に登る儀式があった。研究者の説明を引くと、「昔、シャーマンのイニシエーションとして、刀の刃でできた梯を登ることがあったという。『刀梯』は、2 本の長い材に 13 本の刀の先を上にむけて縛ったはしごである。シャ

ーマン候補者は、はだしでその刀梯に登った後、地面に飛びおりたと伝えられる」[楊紅　2009:164]。また、賀霊によれば、1764（乾隆 29）年に清朝政府は一種の屯田兵として、現在の遼寧省に住むシベ族の兵士とその家族、合計 3275 人を新疆のイリ一帯に駐屯させ、農耕を行わせた[賀霊　1989a：21]。これら新疆に移り住んだシベ族は、遼寧省にいる時の「刀の梯子」に登って新シャマンになる儀式を 1949 年まで行っていた。シベ族の「刀の梯子」は、18 - 49（シベ族のシャマンは天が 49 層と考えている）段で、一般的に 25 段である[賀霊　1989 b：207]。「刀の梯子」をシベ語で「チャゴル」[賀霊　1989b：206]と言い、「刀の梯子」に登ることを、研究者ゲ・ボヤンバトは、「『チャゴル・チャゴラナ』と言い、『チャゴル』はモンゴル語で、遠征を表し、『元朝秘史』に『オルト・チャゴル・チャゴラズ』とあり、『遠征する』という意味である。したがって、シベ族のシャマンのイニシエーションの『チャゴル』はモンゴル語から借用した語である」[ゲ・ボヤンバト　1985：32]と推論している。ゲ・ボヤンバトは、さらに、モンゴルとシベ族のこの儀式は基本的に同じで、このような儀式はモンゴル諸語族[11]の間に比較的普遍的な現象であると強調した。シベ族の「刀の梯子」に登るシャマンのイニシエーションで、新米シャマンは素足で刀の最高の梯子に登ったら、監督のシャマンに、南、西、東の方向にそれぞれ何を見えたかと質問される。南は、イサンジュ・ママ（女性シャマンの元祖）の領域が見えて、西は、ボルハン・バッシ（男性シャマンの元祖）の領域が見え、東はイバハン（悪霊）の領域が見えた[賀霊　1989b：209]と答えて飛び降りる。シベ族のこの問答はシャマンの方向を区別するため行っているものではなく、最上の梯子に登り、質問に答えたことは公に活動できる正式なシャマンになった証となる。また、孟慧英の研究では，中国北方の少数民族に新シャマンの誕生、シャマンの格を高める、氏族祭祀の特徴を帯びたオメイラン[12]祭祀があるという。

「オメイラン祭祀は、かつて内モンゴル・フルボイル盟（現在市 - 筆者注）のエベェキ自治旗のバヤントハイ町、ホンホルジ町、エルグナ左旗オルグヤ民族郷[13]などのエベェンキ民族の中に行われた主な祭祀活動である。隣接するオロチョン、ダフール、バルグ・モンゴル族にもこれと非常に類似する祭祀儀式がある」[孟慧英　2000：335]。

この儀式は、樹を立て、祭壇を設けて、経験があるシャマンの司祭の下で行われる。しかし、その内容には、ホルチン地方のような試練が見られない。

また、同じ様式が韓国のムーダン（シャマン）にも見られる。ホッパールの著作は、韓国のシャマンによる斫刀乗りの儀礼で、将軍神の霊に憑依されてトランスに入った女シャマンが、押し切り両刀の二枚の鋭い刃の上を裸足であるいている古い水彩画を載せ、こうしても傷を負わないことで、彼女

---

11 ゲ・ボヤンバトはシベ族をモンゴル語諸族に含めた。通常、シベ語は、ツングース諸語に含まれている。

12 モンゴル語に「オマイラン」と直接使わないが、語根の「オマイ」は、モンゴル語で女性器を指す。

13 内モンゴルの行政単位のソムに当たる。

は自分のシャーマンとしての能力を証明してみせるのだ[ホッパール　1998:136]と解説している(写真9参照)。

中国南方に住むいくつかの少数民族の巫師（シャマン）にも似通った現象が見られる。湖南省西部に住むミャオ、広西チワン族自治区に住むヤオ、雲南省に住むリス族に「上刀山、下火海」（刀の山に登り、火の海に下りていく）という祭りがある。刀の梯子に登り、炭火の上を歩く[14]。湖南省西部に住むミャオ（苗）族の巫師はさらに、火に入れて真っ赤となった犂の上を歩く、噛む、釘を立てたベッドの上を素肌で転がるパフォーマンスを披露する[林河　2001：23 写真]（写真10、11、12参照)。現在観光資源の1つとなっている。北方と南方のこれらの少数民族のシャマンの儀式に見られる荒行が、同じ起源をもっているかどうかは現時点で不明である。

筆者の見聞（2007年4月8日）では、梯子登りではないが、梯子を地面に横に置き、橋に見立てて渡る儀礼は、沖縄の久高島のイザイホー儀式にも見られる。現在、イザイホーは行われなくなったが、その現場が残されている。梯子は、この世から霊界に渡り、人間と守護霊、精霊の仲介役を務めるシャマンの役割を表すものである。

イテゲル・ブォによれば、刃物の梯子に登って、降りる際、梯子の下に白い布と黒い布が敷いてある。どの布に降りて歩くかで、ブォの方向が判明する。自分の守護霊は、生前、黒い方向のブォだったので、黒い布に降りたという。実は、現在の弟子入り段階のブォの事例から見ると、守護霊が後継者に憑依して、生前どの方向のブォだったかを打ち明かす。そして、後継者がそれに準じて自分がどの方向のブォであるかを決める。シャマンのイニシエーションの「イスン・ダバ・ダバホ」儀式で初めてどの方向のブォかを知ったことではない。「イスン・ダバ・ダバホ」儀式で、ブォの方向を決める行為は、イニシエーションに合わせた象徴的なやり方と言えよう。上述したイテゲル・ブォの話もこれを証明する。

イテゲル・ブォの説明してくれた「イスン・ダバ・ダバホ」儀式の過程は、分離（儀式の準備)、移行（儀式の実行)、統合（ブォに再誕し、集団に戻る）というジェネップの通過儀礼理論に当てはまる。

3.数字の「9」に関する習俗

シャマンとしての位置を獲得するために行われる「イスン・ダバ・ダバホ」儀式に数字の9が1つの重要なポイントになっている。それは、モンゴル人の数に関する信仰に関係がある。諸家の意見では、「ホルチン人を含めたモンゴル人全体が数字の9、あるいは9の倍数の81、99を何らかの象徴的な意味で祝宴、飲食、宗教、祭祀、モンゴル医学、装束、家庭教育など幅広い面で用いる」[ゴワ　2003：584]。

---

[14]雲南旅行網 http://www.km871.net/jnj/index_j06-c.html（2012年5月25日）

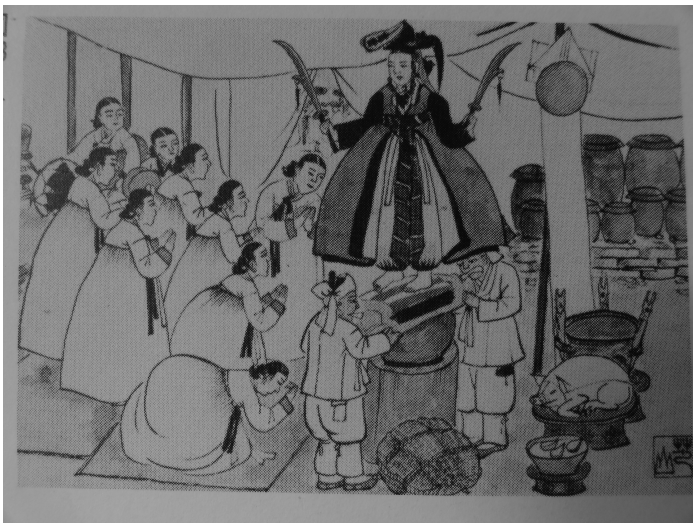

写真 9（左）韓国のシャマンによる斫刀乗りの儀礼［ホッパール　1998：136］。

写真 10（右）ミャオ（苗）族シャマン（巫師）が素足で刀梯を登っている［林河　2001：写真］。

写真 11（左）、写真 12（右）　ミャオ族のシャマンは、火に入れて真っ赤となった犂を噛む、釘を立てたベッドの上を素肌で転がるパフォーマンを披露している［林河　2001：写真］。

「モンゴルのシャマニズムの信仰の中で、9は限りなく大きい、最高という象徴的な意味を持っている」［スチンムンヘ　2000：185］。

「ホルムスタ（最高の天神－筆者注）には其部下の霊体が9 つあつたがチンギス・ハーンにも9 人の将軍がいたし、またその旗には9個の馬の頭飾が描かれていた」［バンザロフ 1971：16］

とされている。奇数の中で、9は、もっとも上の数なので、よく重視される。9の9倍、合計81という数を最も重要視する。ロブサンチョイダンによれば、「9の9倍の数の贈り物は昔から定められた慣例

である。この9の9倍の数の贈り物は皇帝から地方の一般の役人にまで最高な贈り物である」［ロブサンチョイダン　1981：281］という。たとえば、むかし、皇帝や旗王に9種類の家畜を9匹ずつ献上することがあった。この9の9倍の数は敬意を表す最高の数であったことがこれを示している。この信仰が今日でもさまざまな面で受け継がれている。1995年の8月18日にホルチン地方で外部の資金を誘致することを主な目的として開かれた「競馬会」でジリム盟（現在の通遼市）の各旗から大会に祝品を進呈された。ジャロード旗の政府がジャロード旗の民衆を代表して9種類の特産品を9個ずつ、合わせて81個を進呈した。シャマニズムの信仰で奇数を重視する、しかも9を最も大事にする習俗が今日の改革開放政策と市場経済の下ですら、日常生活や公の場で生かされている。

ホルチン地方で、結婚、長寿祝い、開業などの時、めでたい日を選択する。カレンダーを見て決める人もいれば、ブォあるいはそれを分かる人に頼む人もいる。ところが、旧暦の 3、6、9 日は万能の日とも言える。なぜかというと、この 3 日のいずれの日には、何をも行ってもよく、相剋する存在がないと言われる。6 と 9 は 3 の倍数である。この意味で、3 は基本的数字である。9 の 9 倍の 81 に関する理解を深めるため、81 に関するいくつかの習俗をみてみよう。数字の 81 と関わりがある行動をすべて「最も」という語を用いることができる。もっとも大きな贈り物、もっとも大きな礼拝、もっとも大きな禁忌などである。結婚する際、婚家が生家に 81 の贈り物を贈呈することがある。ブォが患者に取り憑いていた強い悪霊を追い払う、離脱してなかなか戻って来ない魂を患者の体に呼びもどした後、81 日の禁忌を課すことがある。100 日間の禁忌もあるが、81 日の禁忌が 7、21、49 日の禁忌と比べて、もっとも長く、強い禁忌として考えられる。たとえば、81 日間患者が家を出ることを禁止し、結婚式に参加しない、河を渡らない（境界を超えない）。81 日間家族以外の人と会わない、外部の人を家に泊らせない。1950 年代以前、テングリや仏教に信仰が厚い信者が仏教の仏に連続して 81 回礼拝することがあった。これは、「最も大きい礼拝」（ハムグ・イヘ・ムルグル）と言われる。

4.「イスン・ダバン・フルグ」（9 つの試練を通る絵）

イテゲルブォ・ブォによると、1950 年代まで、「イスン・ダバン・フルグ」を普段、家に祭るブォがいたと言う。白虎（1962 年生、男性、農民）ブォによると、代々、伝承されてきた「イスン・ダバン・フルグ」（9 つの試練を通る絵）を子どもの頃見たことはあるが、その内容をはっきりと覚えていない。絵を 1960 年代に失くしてしまった。とにかく、「イスン・ダバ」の内容が描かれていたという。民間で、「イスン・ダバン・フルグ」が 1950 から 1970 年代にかけて焼かれた、紛失した、現存のものがないと伝えられている。これまでの先学の研究に、「イスン・ダバン・フルグ」が掲載された資料を筆者はまだ発見していない。1998 に出版された『ホルチン・シャマニズムの研究』に、白翠英が、「イスン・ダバ」の内容を紹介する際に、「李亮ブォの残した『イスン・ダバン・フルグ』に、2 人のブォが長さ 2m の樹の棒の先端を握って、体を回転させている図がある」［白翠英　1998：240］

と記載していることから、白翠英は、1980 年に代に調査を行った際に実見したと思われる。また、筆者が、2007 年の夏、月亮ブォから「亡き李亮ブォの子孫が保管している『イスン・ダバン・フルグ』絵を師匠のホブル・ブォが人に頼んで、写してもらった。その写しをさらに自分は他人に頼んで写した」と聞いた。その絵に、ちょうど白翠英ブォが李亮ブォの残した絵について言及した内容が全て描かれており、月亮ブォのもとで複製した画は、李亮ブォの残した絵の写しであることが判明した。複製画は彩色されているが、李亮ブォの「イスン・ダバン・フルグ」に色が施してあるか否かは不明である。

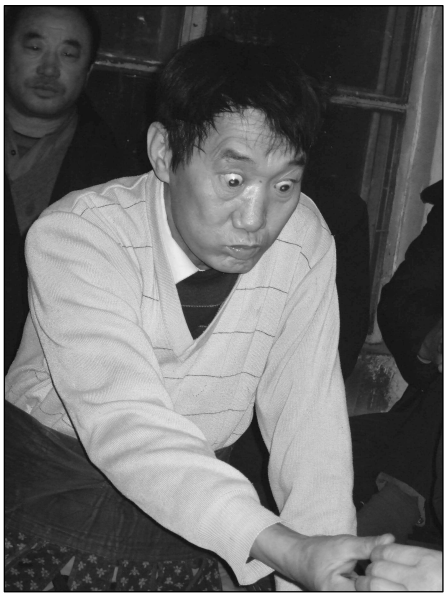

写真 13（左），14（右）トランス中の白虎ブォ。

写真 13 は、降臨してきた守護霊に酒を捧げるとそれを受け取っているところ。

写真 14 は守護霊が託宣と行っている。

写真 15　銅製のオンゴット（黄銅でできている）

大きさは、ほとんど 2 ㎝から 15 ㎝以内である。

霊が銅製のオンゴットに入ると、自ら動きだす場合がある。

また、病気治療や占いの助けとなる。

写真 16　「イスン・ダバン・フルグ」（9 つの試練を通る絵、上半部）

[1]絵の上段の左から雲に囲まれた光背を背にして、仏教の仏と思われる、それぞれ形が異なる 4 尊の仏が座っている。

[2]左から向かって 5 番目に体が青く、蓮華座に立ち、火焔を背負った仏がいる。金剛手（ヴァジラパニ）ではないかと思われる。

[3]2 段の左側に、雲の中、3 柱の女性神か仏が何かを手に立っている。

[4]右側に、雲の中に、女性神か仏が 2 人の子どもと一緒にいる。

[5]その下に、1 列 33 柱の神が 3 列おり、合計 99 柱の神が雲の中に立っている。3 列ともに、中心に立っている神の絵が両側より大きい。3 列の中心に立っている神の上段が女性で、次の 2 段目が男性である。両側に立つ神々の性別を区別することができない。

[6]3 列の神々の下に、左側は、1 本の松の樹が茂っており、隣に白い鳥が右に向かって空を飛んでいる。

[7]右側にもう 1 本の松の樹があり、根本に白い鷹が座っている。

[8]その中心に、三角のテントがあり、その前に、大きな傘形の屋根のテントに王が座っており、左右に 2 人の女性が侍立している。前に子馬がおり、その前に少年らしい人が立っている。

写真 17　「イスン・ダバン・フルグ」（9 つの試練を通る絵、下半部）

[9]下の段の左側の松の下のところに、尖った岩のようなもの中心にある平面に 6 人の人物がおり、5 人が座り、1 人が立っている。

[10]右側に蛇が舌を出して、左に這っている。尾に火がついている。

[11]左側に大きな生い茂る樹がある。最も高いところの中心の枝に裸形の人物と思しきが、手を広げて立っている。樹の上から 2 番目の左側の枝に裸の人物 1 人が、その下の枝に載せられている棺を向かって合掌している。右側の枝に棺が 1 台載せられている。2 台の棺の下側の樹の葉に円形の白い物がたくさん描かれている。隣にネクタイ状（幡）の束が掛けられている。樹の下側の中心の股に、前掛けを身にまとい両手を左右に広げた 1 人が立っている。樹のそばに虎が座っている。樹の根本で大蛇が樹に巻きついている。

[12]蛇は右側に向かって、樹の隣に立っている猛獣（ライオン？）と見つめてあっている。

[13]猛獣の隣に髪が飛び上がり、髪の毛から体全体が赤い色の小さな人物が 1 人走っている。

[14]その隣に 1 匹の犬が左に向かって走っている。

[15]犬の隣に 1 頭の雄牛がいる。

[16]雄牛の手前に 1 人、若い女性と思しきが座って、左手に持つ蓮の花を見つめている。

[17]雄牛の隣に1羽の紺碧の鳥が飛んでいる。

[18]犬の後ろに、雲の中で馬に乗り、全員、頭の上に1羽の鳥が止まった9人の人物が1列に並んでいる。

[19]6人の人物の南側に、 1人の人物(ブォ)が座席に座り、広げた両手に、紐で結ばれたチャン（鐃鉢）を持っている。後ろに、5旒の旗が立っている。胸に銅鏡1面をつけている。

[20][19]のとなりに1人人物(ブォ)の頭に鳥が座っている。右手を立たせて礼拝して立っている。

[21]座席に座っている人物の南西部に鳥の羽を思わせるブォ服を着て、針か釘と思われるものをびっしり立てたフェルトや板の上に立っている。

[22]隣にブォ服を着、銅鏡を腰に巻いた1人のブォが左手に刀を持って立っている。

[23]針の上に立っているブォの前に、左側から、ブォ服を着、銅鏡を身にまとったブォが1人、燃える鍋に右手を入れて何かを取り出そうとしている。左手に太鼓を持っている。

[24]その隣に、同じくブォ服を着、銅鏡を腰に巻いた1人のブォが右手で持っている三角の鏝を噛んでいる。左手に、もう1本の鏝を持っている。

[25]その隣のブォ服を着、太鼓を腰に巻き、右手に太鼓を持って、膝まで燃える火の中に1人のブォが立っている。

[26]後ろに、1人のブォがブォ服を着、銅鏡を腰に巻き、三角の犂を両手、両足に嵌め、頭にかぶり、口に噛んで立っている。

[27] その隣に、9段の刀でできた梯子があり、ブォ服を着、銅鏡を巻き、3段まで上っているブォが1人いる。

[28]梯子の9番目の段、即ち、頂点に、ブォ服を身にまとった1人のブォが右手で礼拝し、左手を腰に刺して立っている。

[29]梯子の隣に、長い棒を頭の上まで両手で持ち上げたブォ2人がいる。同じくブォ服を着、銅鏡を腰に巻いている。上半身は裸である。

[30]その隣に、ブォ服を着、太鼓を左手に持った1人のブォが3つ並べた「∩」形物を通りぬけている。「∩」の上に三角の旗が立ち、旗の棒の先端は三角になっており、下に白い色の鬣が巻かれている。

[31]その隣に、1人のブォ服を着、銅鏡を腰に巻き、刀を腹へ押し込んでいるブォがいる。左隣に小柄（腰から少し下ほど）なブォが前かけをつけ、立っており、体に刀を押し込んでいる人の銅鏡をつかんでいる。

[32]その隣に、ブォ服を着、銅鏡を腰に巻いているブォが長剣を腹に刺しこんでいる。手前に鼻が長い小柄な人間か動物（背の高さは腰のほど）が立っている。

月亮ブォから入手した「イスン・ダバン・フルグ」をイテゲル・ブォに、説明していただきたいと

見せると、筆者の想像以上に興奮ぶりだった。「どこで入手したのか。これは、わしの通った光景だ。まるで、当時を写真に撮ったようだ。オンゴット（精霊・守護霊）が火を放って飛ぶさままで描いている（絵の[13]を参照）。この樹は白雪山（ブォのあの世）の1本の樹である。そうそう、蛇が樹を巻きつている」と喜んで語り、興味深げに見つめた。続いて、筆者に次から次へと説明してくれた。月亮ブォが「イスン・ダバン・フルグ」に虎、蛇、犬などの動物をいることを筆者に次のように説明した。「師匠のホブル・ブォが治療の際に、『狂った虎、シタルの1本の樹に巻きついている狂った蛇、悪霊を追い出してください』と唱えていたが、当時、意味を分からなかった。この絵に反映されている精霊たちのことを言っていた」と説明した。絵はブォの世界観に基づいて描かれたものである。オニソ（1955先生、男性）・ブォに、絵を見せて、なぜ、仏を最も上に描くかと尋ねると、「（ホルチン・ブォの元祖とされる）ホブグタイ・ブォは仏との戦いで敗れてしまったためである」と説明してくれた。内モンゴル博物館に所蔵されている、16世紀から20世紀までのタンカ（チベット仏教の仏画）に目を転じると、中心に仏が座っており、上段に3人、あるいは5尊の仏を描かれていることが確認できるため、「イスン・ダバン・フルグ」は、タンカを手本に描かれていると思われる。中心に座って、儀式を見守っている男性は、仏画で中心に座す仏の位置を占める。イテゲル・ブォは、これは、当時の旗王だと説明し、絵の上段に描かれている仏の像に関心を示さなかった。関心を寄せたのは、「イスン・ダバ・ダバホ」儀式の現場と、ブォのあの世である白雪山の1本の生い茂った樹と、その周辺にいる精霊たちである。たとえば、上述した絵の[3]の内容をイテゲル・ブォに聞くと、「ボルハン（仏）である」と簡単に説明するだけだった。オニソ・ブォは、「送子観音」（「子を授ける観音」）と中国語で答えた。絵の[1]の4人の仏をオニソ・ブォは、「4人のマハランサ」、つまり、金剛界の4仏と説明した。しかし、研究者によれば、マハランサとは、「4天王というインドの言葉である」[エルデニ　1997：65]という。[5]の3列の99の神をイテゲル・ブォは99のテングリと説明した。3列の中心にいるテングリは他より大きく描かれている。皇帝、王侯、道教の主尊など、権力者、主宰神は中央に実際より大きく描くことがあり、それによるものではないかと思われる。したがって、これはリーダー・テングリである。[6]と[7]の樹のところに空を飛ぶ白い鳥と、樹の根本で休憩中の白い鷹は、鳥の精霊である。[8]は、当時の旗王が2人の夫人と子供といる。「イスン・ダバ・ダバホ」儀式に王も臨御することがあったことを物語る。ジャロード旗の亡きエルデニオソル・ブォの娘メデッマによると、満洲国の時代にエルデニオソル・ブォはダルハン旗（ホルチン左翼中旗）の王府から近いシンという村で行われた「イスン・ダバ・ダバホ」儀式に参加した。当時のダルハン王の夫人はジャロード旗出身の人だったので、ジャロード旗からやってきた貧困なエルデニオソル･ブォが、儀式に奉納すべき家畜とそのほかの費用を免除してくれたという。この語りから、当時、「イスン・ダバ・ダバホ」儀式を少なくとも旗王が知っていたことを意味する。

イテゲル・ブォによると、[9]は、「ダバン・エジド」、即ち、儀式を見守ってくれる、ブォのあの世の「ブォの 6 人の師匠」である。囲まれているのは、ブォの守護霊を招請する際、降臨してきた守護霊に挨拶する際にたびたび登場する「チャヒゴル・チャガン・ハダ」(火打石の白い岩)であり、ブォのあの世を生き生きと描いている。

写真 18
オニソ・ブォが守護霊を招請しているところ。首にかけている数珠は駱駝の骨でできたものである。
(2010 年 8 月)

[10]の蛇は、毒蛇で、ブォを助けて悪霊を鎮める力がある。[11]は、ブォのあの世の「シタル・イン・ガッチャ・モド(1 本の樹)」であり、その上に載せてある棺は、亡きブォのものである。棺を描くのは、現実の世界では、亡きブォの体をばらばらにして、ブォの樹に掛けるが、その霊魂はブォのあの世にあるこの 1 本の樹に赴く。棺でまた、亡きブォを樹上葬したことを示している。樹の上に立っている裸の人は、正に亡きブォの霊である。ここから出て、後継者の守護霊となる。樹の下側の葉についている白い円形のものは光る銅鏡で、同じく亡きブォの霊を象徴している。ブォ達は、鏡で守護霊を象徴する。ホルチン地方のブォの神歌にブォの樹に鏡が生えるとある内容と一致する。樹の根本に巻きついているのは、蛇の精霊のロスであり、地霊、水の精霊でもある。また、この樹に巻きついていると言われる毒蛇は、蛇の精霊であり、樹を守っている。根本の虎とライオンは同じく虎の精霊とライオンの精霊である。[13]は、火と光を放ちながら移動するブォの守護霊である。[14]の犬は狂犬であり、ブォを助けて、悪霊を鎮める。また、1 匹の雄牛も悪霊を鎮める存在。隣にいる蓮の花を見つめる少女を、イテゲル・ブォは説明しなかった。タンカで金剛手菩薩と蓮華手(蓮華を手に持った)菩薩(場合によっては、吉祥天女)は、よく 1 組で描かれるので、多少その影響を受けたと思われる。筆者はさらに、この少女は、ブォの伝承におけるブォが支配下に入れた、18 歳で亡くなった処女の霊ではないかと筆者は推測する。なぜかというと、ブォの話の中で、この補助霊はしばしば言及され、1950 年代以前、ブォにとって、この種の補助霊が一定の位置を示していたと思われるからである。イテゲル・ブォは、悪霊を追い払う治療において、「イスン・ダバン・フルグ」にも登場する精霊たちの加護を求めて、次のように歌うという。

赤褐色の縞模様の虎は、威嚇の鳴声をあげて追い出しなさい。
赤褐色の雄の牛は、追跡して追い出してください。

ハイシャン地方（具体的な場所は不明）の鳥は、噛み付いて追い払ってください。

荒ぶる狂犬は、後を追って追い出してください。

鱗がある蛇は這って進んで追い出してください。

治療において、悪霊を追い払ってくれるよう頼んでいる精霊が「イスン・ダバン・フルグ」に登場したことに、イテゲル・ブォははなはだ新鮮さを感じた。

[17]は、同じく悪霊を鎮めてくれる鳥の精霊である。[18]の馬に乗り、それぞれの頭に鳥が止まっている 9 人は、ブォの守護霊たちで、鳥が頭に止まるのは、守護霊の移動が鳥で象徴されるからである。イテゲル・ブォの説明から、現在のモンゴル国出身の高名なる彫刻家ザナバザル（1635 - 1723）の描いたアバダイ・ハーン(1554－1588)の肖像に目を向けてみよう(図参照)。そこに、馬に乗っている人が多く描かれており、中に[18]と非常に類似する光景がある。馬に乗った 8 人が 1 列に並んでいる。これは現実の世界を描いているため、[18]のように雲が描かれておらず、頭の上に鳥が止まっていない。こうして見るとハーンやその護衛兵その姿が[18]の登場につながったではないかと考えている。[19]と[20]は、「イスン・ダバ・ダバホ」儀式を監督している「ダバン・バッシ（師匠)」である。[19]は、レイチン[15]である。なぜなら、レイチンは、座って守護霊を呼び、チャンを用いるからである。その服装は、かつて、仏教の寺院に活躍したラマ・ブォであるチョイジンのそれと類似する（2009 年 12 月 18 日の木村理子氏による教示)。[21]の頭に鳥が止まり、礼拝している人も「ダバン・バッシ」である。頭に止まっているのは、守護霊が憑依して守護していることを示す。[21]は、実際に行われている「イスン・ダバ・ダバホ」儀式の現場である。「針のダバ」を通っているところである。イテゲル・ブォは、釘をびっしり立てたフェルトの上を転がったと自分の経験を説明したが、この絵では、針の上に立っており、方法にバリエーションがあったと思われる。[22]の左手に何かを持って立っている人は、「ダバン・バッシ」で、「ダバ（試練）を通っているブォを監督している。[23]は、油のダバである、すなわち、煮えたぎった油の中から古銭を取り出している。[24]は、鏝のダバである。真っ赤になった鏝を噛んでいる。[25]は、火のダバである。イテゲル・ブォの言ったように、ズボンを膝まで捲って火の中に入ることである。[26]は、犂のバダである。真っ赤な犂を被ったり、持ったり、足に入れたりしている。伝承で、犂の上を歩くと言われたがここではそれより難行に挑戦している。イテゲル・ブォは、犂の上を 9 回繰り返して歩いて通ったという。[27]、[28]は、刀の梯子のダバである。ここでは、梯子そのものが、草切り用の刀になっている。イテゲル・ブォによると、馬車をひっくり返して立たせて、その上に草切りの刀を縛って通ったという。[28]の梯の頂点に 1 人が立っているのは、「ダバン・バッシ」である。無事に登れるよう祈祷している。[29]は、「サバン・

[15] レイチンとは、ホルチン地方の仏教に帰依したシャマンの一種で、かつて、お経を唱えて守護霊を招き呼んだ。

ダバ」である。2 人のブォは長い棒を持ち上げて、体を回転させている。[30]は、「潜りのダバ」である。長い鉄線を丸めた「n」形の物に刀を丸めて縛り、その下を通っている。[31]は、腹に刀を押し込んでいるところである。ブォは守護霊の力でこの種の荒行をしても平気なのは守護霊の力によるものである。その前に立っている人は、正に守護霊で、負傷しないよう守護しているところである。[32]は、体に剣を刺し込んでいるところで、小柄なのは守護霊で、同じ守護しているところを描いたものである。イテゲル・ブォによれば、この「ホス・ダバ」(2 つの試練）が行われたが「イスン・ダバ」(9 つの試練）に入っておらず、力の強いブォが実際に行って会衆に見せるという。ブォが仰向けになると、2 人の若者が刀を腹の上に載せて斧で押し込むと、斧は跳ね返り、体に入らない。剣の場合も同様だった。それは、守護霊の「ホリガ・タルニ（止める呪文)」または、「ガルハン・タルニ（輪の呪文)」の力である。この絵は、まさにそれを表現したものであると語った。「止める呪文」は、ホルチン地方のブォたちが一般的に知っており、使えるかどうかはブォの守護霊の力によるものであるという。

以上のように、「イスン・ダバ」を通った経験があるイテゲル・ブォが自らの経験とシャマニズムの世界観、神歌などに基づいて「イスン・ダバン・フルグ」(9 つの試練を通る絵）について説明してくれた。この絵は、ホルチン地方のシャマニズムの世界観とその実践をリアルに表現してものである。

この絵から、仏教とシャマニズムの習合した姿をはっきりと読み取ることができる。筆者は、基本的に、イテゲル・ブォの説明に同感である。ブォの霊的力が霊界の守護霊の力に由来するという見解では、人々の考え方が一致している。それを目に見える形で表現したのはこの絵である。これもこの絵の根幹をなすものと見ることができる。「イスン・ダバ」を通っている式場で、仏教の仏、99 柱のテングリ、ブォのあの世のリーダーの「テルテグドスの 6 人の師匠」、亡きブォの霊、動物の精霊の守護のもと、火の中に入る、煮えたぎった油に手を突っ込んで、針を取り出すなど普通では考えられない行を披露していることを描写した。「イスン・ダバ・ダバホ」儀式で最後に行われるのは、「刀の梯子のダバ」である。その頂点に登って、梯子から地面に降りる際、降りた方向からブォの方向[16]を決めるという説がある。それは、ブォの守護霊の生前の方向によって、決められている。梯子の頂点に立つと、まさに普通の人間から守護霊の力を賜るブォとして生まれることを象徴している。さらに霊界に身を置いたことを象徴する。「イスン・ダバ・ダバホ」儀式の内容を見ると、火、熱さ、鉄がポイントで、特に火は主役を演ずる。すなわち、火の中に入る、煮えたぎった油に手を入れる、灼熱の鏝を舐めるなど火に関する試練が最も多い。これは、火の統御者たるブォを端的に示している。「イ

[16] 民間では、ホルチン地方のブォを黒い方向のブォと白い方向のブォと 2 種類に分ける。仏教に帰依したのは白い方向のブォで、帰依しなかったのが黒い方向のブォと言われる。

スン・ダバ・ダバホ」儀式に、鍛冶師信仰、鉄と火の信仰、火の支配者たる守護霊とブォの信仰複合が現れている。

写真 19 アバダイ汗（ハーン）の肖像。布地に描いた絵、ウランバートル市、国立中央博物館所蔵[ザナバザル　1994：13]。

5.「ホス・ダバ・ダバホ」儀式の復活

上述したように、1945 年以降、「イスン・ダバ・ダバホ」（9 つの試練を通る）儀式は再び行われていない。その理由は、ホブル・ブォによると、「儀式を監督する 9 つの試練を通ったブォが、少なくとも 9 人必要だ」。月亮ブォは、現在のブォの守護霊は、長い間弾圧を受けたので、霊力が強くなく、かつてのように糸のような細い刃物の上を歩いたり、煮えたぎる油に手を入れたりしても無事を確保し、守護してくれる守護霊が昼の星のように少なくなったと語った。しかし、現実的な社会状況から見ると、大勢の人を集めて、そのような儀式を行って、もし怪我人などが出た場合、社会問題となり、ブォ達の活動がより規制される可能性がある。こうした配慮が大きいと思われる。一方、ホルチン地

方で、「ホス・ダバ」、すなわち、「ホス・ダバ・ダバホ」（2 つの試練を通る）儀式が近年、頻繁に行われている。具体的な情報は、表を参照されたい。

近年、復活しつつある「ホス・ダバ・ダバホ」儀式で、文字通り、2 つの試練が行われているかと言うと、実は、3 種類の項目が行われている。その内容は、①刀のダバ。草切り用の刀を踏む、上を歩き渡る、②犂のダバ。農耕用の犂を火に入れて、上に油をこぼすとすぐ燃えるほど加熱して、脚に油をつけてその上を踏み渡る。③鏝のダバ。真っ赤になるまで焼いた鏝を噛む。このような 3 種類の試練が行われているが、「3 つのバダ」と言わないのは、イテゲル・ブォによると、1950 年代以前の「ホス・ダバ」（2 つの試練）も上述した内容と同じだったからだという。ホルチン地方で、ブォ達の間に「3 つのダバ」なる表現を用いなかったからである。モンゴルでは、「3 回の困難や危険（ダバ）を乗り越えると無事となる」という言いまわしがあり、ブォの「試練を通る」儀式において、「2 つの試練」という言い方を採用したのはこのような背景があるのではないかと思われる。筆者は、「ホス・ダバ・ダバホ」儀式をまだ直接、参与観察していないが、2006 年 10 月 30 日（旧暦の 9 月 9 日）に、ホルチン左翼中旗 TA 村で、長老ブォのホブルの自宅で行われた儀式を、実妹に依頼し、音声資料と映像資料を採取してもらった。現在、その資料と先学の研究、筆者の聞き取り調査で得た一次資料を基に、近年復活しつつある「ホス・ダバ・ダバホ」儀式を紹介し、ホルチン・モンゴル社会における、その意義を検討する。

(1)「ホス・ダバ・ダバホ」（2 つの試練を通る）儀式

現地調査すると、「ホス・ダバ・ダバホ」儀式に参加した経験があるブォは、しばしば非常に誇らしげに、その経験を語ってくれる。これらの新米ブォにとって、「ホス・ダバ・ダバホ」を通ったことは、普通の人と自分を明確に区別できる証とされる。また、「ブォは、試練を通れば通るほど上達する」という言い回しに強い執着心を持ち、機会があれば、試練を通ることを望んでいる人も少なくない。

筆者が 2006 年 9 月にホルチン左翼中旗 TA 村を訪ねてホブル・ブォをインタビューした際、「旧暦の 7 月 7 日に、『ホス・ダバ・ダバホ（2 つの試練を通る）』儀式を行ったばかりだが、自分は、年を取り、体が衰弱してきているので、旧暦の 9 月 9 日にもう一度、ダバ・ダバホ儀式を開催したい」と教えてくれた。その日の午後 4 時頃、住み込みで見習い中の弟子のセンゲ（1974 年生、農民）が 10 数頭の羊と山羊を追って、庭に入って来た。昼間は守護霊を招請しないので、男の弟子は、交替で放牧しているという。これらの羊は、2006 年 8 月に開催した「ホス・ダバ・ダバホ」儀式で、参加したブォが「ダバン・シュース」（儀式に奉納した供犠）として奉納した羊[17]で、儀式で全部屠殺しなかっ

[17] 2006 年当時、儀式に奉納された 1 頭の羊や山羊は 300 元から 500 元だった。2011 年の時点では、1000 元から 1300 元である。

たため、生き残ったと説明してくれた。すなわち、儀式で参加者の献上した供犠羊の中から、象徴的に数匹を屠殺し、ブォの守護霊たちに奉納して、残ったものがホブル・ブォの所有物となったことを示している。ホブル・ブォが、「ホス・ダバ・ダバホ」儀式を主催するのは、伝統文化の復活に貢献しているだけでなく、経済的なメリットもある。

写真 20
弟子入り中のセンゲは、師匠ホブル・ブォの家にて。
（2006 年 9 月）

近年、復活しつつある「ホス・ダバ・ダバホ」儀式から見ると、開催される時期は、旧暦の 7 月 7 日、あるいは、9 月 9 日が重視されていることが分かる。新米ブォの守護霊がこの両日に「口を開く」と伝えることが少なくない。両日は、テングリは門を開き、守護霊が後継者に憑依するめでたい日としてブォに重んじられている。

次に、妹（1974 年生、公務員）が映像を撮ってくれた資料をもとに、「ホス・ダバ・ダバホ」儀式について、簡単に述べる。2006 年 10 月 30 日に行われた儀式で、ホブル・ブォの弟子のオニソ・ブォは、自分の弟子を 30 人ほど連れて参加した。すなわち、今回の儀式の参加者は、主にホブル・ブォの弟子と、弟子の弟子たちから構成されている。参加者の居住地は、ホルチン左翼後旗、中旗、フレ旗、ホルチン右翼中旗で、さらにシリンゴル盟からも参加者がいた。

オニソ・ブォは、2007 年 1 月筆者に、「師匠が健在な限り、自ら『ホス・ダバ・ダバホ』儀式を行わない。師匠のホブル・ブォが開催する際、希望する弟子を連れて参加する。師匠が亡くなると自分で行う」と語った。オニソ・ブォはこのようにするのは、師匠に敬意を払っているからであるという。儀式に参加する人は、謝礼として主催者に最低 100 元を払うほか、「ダバン・シュース」として羊を 1 頭奉納する人も少なくない。オニソ・ブォの言葉によれば、師匠に対する恩返しとしてこうした配慮があるそうだ。映像資料を見る限り、今回の儀式に 60 人前後が儀式に参加した。村から大勢の人が見物にやって来た。

儀式の順序は次のようである。

① ホブル・ブォの居間と儀式を行われる庭でそれぞれ祭壇を設置した。テーブルに線香を焚き、神酒に点火した。

② 居間の祭壇に向かって、ホブル・ブォは、儀式を始めようとしていることを、テングリをはじめ、神々、守護霊たちに伝えるため、神歌を歌って報告する。亡き妻の姪（弟の娘）で、弟子のフダ

ゴラと次女（50 代、農民、ブォではない）が唱和する。その次に、神々と守護霊たちが儀式の現場に降臨してきて、参加者を守護してくれるよう懇願する。儀式に参加するため集まって来た数多のブォが、床いっぱいに跪いて拝む。観客はその周辺に立って見物する。

③ 続いて、供犠羊を生きたままに捧げる。ホブル・ブォは、供犠羊の各部位を 1 つ 1 つ丁寧に神々と守護霊に神歌で叙す。

④ 供犠羊の清め、屠殺。今回 6 頭を捧げた。儀礼のために集められたのは 10 数頭である。供犠は、主に、「ダバン・エジド（儀式を守護してくれる守護霊）」とブォの守護霊、補助霊に捧げる。

⑤ 銅製のオンゴット（神偶）を血に浸す。

ブォたちがそれぞれの銅製のオンゴットを絶命したばかりの供犠羊の胸腔に入れて、生血に浸す。皮を剥ぎ、内臓を取り出す前に銅製のオンゴットを出す。これによって、銅製のオンゴットの力が活性化される。

⑥ 供犠を丸ごと煮ている間に、今回の儀式のためやって来た通遼市テレビ局、内モンゴル民族大学のホルチン民族文化研究所の研究者、大学院生のため、ホブル・ブォは、テングリへの祈り、守護霊を呼ぶ、守護霊へのあいさつ、守護霊を送り返すなど神歌を歌って見せる。ホブル・ブォの次女とフダゴラが唱和する助手の役割を担う。

⑦ 煮あげた供犠肉を祭壇に生前の姿のように復元。

⑧ 儀式に参加するブォ達が床一面に跪く。

⑨ 煮あげた犠羊を神々、守護霊に叙し、祈りを捧げる。

⑩ ホブル・ブォはそれぞれ名前が異なり、各方向に位置するテングリに祈りを捧げ、その次に、ボームル（家畜と家の神の一種）とその他の神々、守護霊に神歌で祈祷する。そして、銅製のオンゴットに憑依する精霊たちに祈祷し、供犠羊を頭から尾まで、内臓の各部位を順に叙す。また、「ダバン・エジド」、ブォの守護霊たちに祈りを捧げ、本日の儀式を守護してくれるよう祈願。

⑪「ホス・ダバ・ダバホ」儀式の実行。

儀式は、多勢の見物客の前で行った。庭に、2 本の草切り刀を、それぞれ刃を地面に出して埋め、犂と鏝を燃える火に入れて熱する。ホブル・ブォは、庭に設置された祭壇（線香と酒）のそばに（体力の関係で）座って「ダバン・エジド」（儀式を守護する守護霊たち）を召喚し、守護を乞う。次に、「試練を通る」荒行が始まった。まず、オニソ・ブォとホブル・ブォのもう 1 人の 40 代の弟子がそれを行って皆に見せた。刃物の上に脚を載せて立ち、刃物の上を歩き渡る。続いて、ブォ達が順番に行う。熱した犂を地面に載せ、ブォ達はサラダ油に片脚を漬け、その上を 3 回踏む。熱さのため、油が燃え上がる。最後に、灼熱した鏝を噛む。

このようにして、怪我人なく、儀式が無事に終了した。儀式中、多くのブォは、数珠を頸にかけ、

あるいは銅製のオンゴットを袋に入れて頸に提げる、あるいはポケットに入れて、無事に通ることを守護してくれるよう願った。中に合掌する人もいた。

⑫共食

「ホス・ダバ・ダバホ」儀式が終了すると、供犠羊の肉汁に玉蜀黍の精米を入れて粥を炊き、供犠肉を粥に足す。それを儀式の参加者、見物者に振る舞う。

(2) ブォたちの守護霊の招請

儀式終了後、夜、ホブル・ブォの自宅でオニソ・ブォは、師匠の弟子と自分の弟子の守護霊を招請して、挨拶を行った。多数参集したブォ達と取材者にとって、多彩な守護霊たちのトランスの表情を満喫する絶好の機会となった。オニソ・ブォは、降臨してきた守護霊にまず、本日は、守護霊の守護のおかげで「ホス・ダバ」を通ったことに謝意を表明する。しかし、守護霊は、年配のホブル・ブォ、誘導役を務めたオニソ・ブォには「お疲れ様」とあいさつしつつも、後継者を「信じる半分、信じない半分」（おまえは半信半疑だ）と怒る光景も見えた。オニソ・ブォは弟子ブォの守護霊に、後継者が治療を行う際、霊感で適切な教示を与え、治療を助けてくれるよう必死に頼む場面もあった。多くのブォが守護霊を招請したがっているため、オニソ・ブォが 1 人のブォの守護霊と言葉を交わす時間が非常に短かった。最初の数人の弟子ブォの守護霊とだけは、数分間使って話した。

この場で、また、クライアントの対応にも当たった。「ホス・ダバ・ダバホ」儀式を知らずに、ホブル・ブォの治療を受けるため、シリンゴル盟から 2 人の姉妹がやってきていた。オニソ・ブォは、疲れている師匠のホブル・ブォに代わって、クライアントに託宣を行った。2 人の姉妹を巫病と判明して、それぞれの守護霊を招請したが、降臨してきた守護霊が口を開いた。巫病者の守護霊を初めて招請したにもかかわらず、すぐ口を開いたことに現場にいた筆者の実妹が非常に驚いたという。すなわち、2 人の姉妹は、その日に新米ブォとなったのである。もし、その日に、この儀式を実見しなかったら、巫病と診断された際に、戸惑いや抵抗があったかもしれないが、1 日中儀式をたっぷり見ているため、この運命を黙認して、自然に受け入れたに違いない。

6. まとめ - 「ホス・ダバ・ダバホ」儀式の役割効果

1999 年にホブル・ブォによって、54 年ぶりに「ダバ・ダバホ」（試練を通る）儀式を公の場で復活させた。「ホス・ダバ」（2 つの試練）が「イスン・ダバ」（9 つの試練）より行う項目が少ないが、「イスン・ダバ」のポイントとなる要素が含まれている。火と鉄である。「ホス・ダバ・ダバホ」（2 つの試練を通る）形式は、かつての「イスン・ダバ・ダバホ」儀式の形式と類似している。したがって、効果は類似する。年配のブォの話によると、1950 年代以前、新ブォの誕生儀式として、師匠ブォは自

宅、あるいは弟子の家で「ホス・ダバ・ダバホ」儀式を行った。これは、弟子入りから1人前のブォになるプロセスの1つの内容である。その儀式は、小規模で、家庭的な性質を帯びる。しかしながら、これを通ったとしても、1人前のブォとして公に認められたわけではない。公開して行われる「イスン・ダバ・ダバホ」(9 つの試練を通る）儀式を通じて、ブォとしての地位を得る。現在行われている「ホス・ダバ・ダバホ」儀式は、師匠の自宅で行われるのが基本だが、近年の参加者の数から言うと、昔の「イスン・ダバ・ダバホ」儀式と匹敵する。交通と通信手段の発達によって、その影響力が強い。この意味で、今日の「ホス・ダバ・ダバホ」儀式は、かつての「イスン・ダバ・ダバホ」儀式の役割を果たしている。実施内容はそれほど重要ではなく、「ダバ・ダバホ」（試練を通る）儀式を開催して、それに参加したことが意味を持つ。「ダバ・ダバホ」儀式は、かつて、ホルチン地方のブォに資格認定証の役割を果たし、また、儀式に関するエピソードがブォと民衆の間で語り草となり、今日まで多く伝承されてきた。それらが、ホルチン・シャマニズムの欠かすことができない内容となり、伝統文化として認識されている。そして、今日では、「ダバ・ダバホ」儀式の部分的な復活が、漢民族と雑居、あるいは漢民族に囲まれ、その影響を隅なく受けて生きるホルチン・モンゴル人の精神に刺激を与えるに違いない。ブォは、伝統文化の最も有力かつ動的存在として、「ホス・ダバ・ダバホ」儀式に参加することは、大勢の人の前に、守護霊の力を示す機会でもあり、ブォの存在感をアピールして、人々のブォに対する関心を引くよい契機となり、新米ブォにとって、自分を1人前のブォとして宣言する機会でもある。多くのブォは、ブォとしての力を強める貴重な機会と考えている。儀式は、さらに、次の新ブォを生みだす機会にもなっている。筆者が 2007 年 1 月にオニソ・ブォの家で参与観察と聞き取り調査を行った際に、ホルチン左翼後旗在住のビリグフ（1986 年生、男性、農民）が弟子入りしていた。2007 年 7 月に再び、オニソ・ブォの家に行くと、ビリグフの兄のダムリン（1971 年生、農民）も弟子入りしていた。巫病の経験を尋ねると、次のように語った。

2006 年秋、弟のビリグフが師匠のオニソ・ブォに連れられて、ホブル・ブォの主催する「ダバ・ダバホ」儀式に参加に行く際、弟のビリグフに付き添って行った。儀式中に、後継者（憑依相手）がいる守護霊（亡きブォの霊）、まだ後継者が見つかっていない守護霊たちが降臨して、儀式を見守った。そのときに、今僕に憑いている守護霊が、僕を見て気に入って、後継者として選んだ。儀式が終わって、家に帰ってきて間もなく、わけもなく怒りっぽくなった。野外に行きたくて、家に入ると怒りだす。弟に巫病と診断された。その後、弟と一緒にオニソ・ブォの家に来て、託宣を乞うとやはり巫病と判明した。(2007 年）春弟子入りしたが、農繁期だったので、すぐ家に帰った。守護霊は、生前、アル・ホルチン旗に暮らしていた男性ブォで、弟に憑いているのは、母方の先祖のブォだった人の霊である。

このように、儀式が終了後、徐々にブォになった人がいれば、上述した2人の姉妹のように、儀式後即座にブォになった現象も見られる。もし、彼（女）らは「ホス・ダバ・ダバホ」儀式の現場に立ち、自分の目で見て、肌で感じていなかったら、ブォという道を歩まなかったかもしれない。しかし、儀式は、こうした新米ブォが増加する機会を提供しているのである。儀式に参加したことを皆誇りに思い、更に繰り返し参加を望むブォ、弟子ブォが少なくない。2007年1月から2012年3月まで、オニソ・ブォの家で数回インタビューを行った際、「『ホス・ダバ・ダバホ』儀式に参加した」、「2回参加している」と誇りをもって語るブォが数人もいた。

高定音（1965年生、女性、農民）ブォは、当時の状況を次のように語る。「我々の儀式を見ようと村の人がたくさん来てくれた。都市からも先生と学生がやって来た。その人たちの前で、自分はブォとしてとても誇らしく思った。ブォではない人は参加できない」。ブォのための儀式であることを強調し、ブォとしてのアイデンティティに誇りを持っている。参加者ブォにとって、最も現実的な意義は、ブォとしての力と信仰心を強めたことにある。オニソ・ブォの弟子で、ジャロード旗の牧畜民バト（1971年生）は、2009年旧暦7月7日（太陽暦8月26日）に師匠オニソ・ブォの家で「ホス・ダバ」を通った。次のように語る。「『ホス・ダバ・ダバホ』儀式に参加して、わたしに2つの効果をもたらした。1つは、病気治療や占いを行う力が前より強くなった。もう1つは、守護霊が存在すると確実に信じるようになった。守護霊と言っても、普段、目に見えなく、手で捕まえられないため、いつも半信半疑だった。儀式の際、自分の番を待っているのに、今にもすぐやろうという思いが湧いてきて自分をコントロールできない。灼熱の鏝を噛み、灼熱の犂を踏み、刃物の上を歩いて平気だったことが守護霊の守護だと信じた」。

2007年1月に、「ホス・ダバ・ダバホ」儀式が行われたTA村に調査を行った時、ホブル・ブォは酷い風邪をひいていたので、その西隣家でインタビューを行った。ホブル・ブォを見舞いに来た人々もこの家で一休みしていた。当時、人々は、ホブル・ブォの病気に最も関心を払っていたため、話は、ホブル・ブォのことが多かった。次の話を聞いた。「現在、『邪教である』祷告[18]が流行っている村がある。わが村に老ブォ（ホブル・ブォ）がいるからその守護霊が祷告の流行を許さない。活動するとすぐ警察が来る。すごく流行っている村がある。『ホス・ダバ・ダバホ』儀式を数回も行っているから、たくさんの守護霊がわが村を守護している」（50代の男性、同じ話を40代の女性もした）。「老ブォがいるから、『ホス・ダバ・ダバホ』儀式を復活させた。これは我々モンゴル人の伝統文化だから、老ブォによって、復活させないと永遠に消えてしまう」（70代の農民）、「老ブォがこのようにしないと、我々が見ることができないばかりか、そういう文化があったことすら知らない。それを見て、わたしたちにそのような文化があったと誇らしく思った」（50代の男性）。儀式へのプラスの評価が

[18] 1990年代半ばから、特に2000年以降、ホルチン地方の農村で、キリスト教が「祈祷」という名目の下で変わった形で流行している。信者が集団で暗闇の中で祈祷する、長幼の序を無視するなどのことから民間で「祈祷」を邪教、あるいは変わった信仰というイメージが存在する。

ある一方、マイナスの評価もあった。別の場所で次の評価を聞いた。「それは、ブォのための儀式だが、わたしが参加しても通れる。真剣に通っている人がいれば、怪我を恐れて、ごまかしている人もいる。見たところ、そんなに難しくない」(30 代、女性、知識人)。「『ダバン・シュース』は、守護霊への奉納品だが、すべて捧げなかった。余った生け贄は、師匠の所有物となる」(40 代の儀式の参加者、ホブル・ブォの弟子)。

このように、新米ブォたちは、イニシエーションとして、参加を希望し、ブォとしての力と信仰心を強める効果を得られている。民衆は、それを伝統文化の中で位置付け、重視している。また、現代社会において、それは形式的で、伝統文化の復活の美名の下に、経済的利益が潜んでいることを問題視する人もいる。総じて言えば、現在、復活している 2 つの試練を通る儀式が、師匠ブォにとって、経済的な利益が潜んでいることを排除できないが、伝統文化の継承に貢献している。また、ブォを社会的に承認してもらう機会として、かつての 9 つの試練を通る儀式の役割を果たし、さらに、その場が守護霊たちの喜んで集まる場となり、新米ブォを生み出す場ともなり、シャマニズムの活性化に貢献している。

2006 年旧暦 9 月 9 日（2006 年 10 月 30 日）に行われた「ホス・ダバ・ダバホ」儀式

写真 21（左）ホブル・ブォが神歌を歌って、神々、守護霊たちに「ホス・ダバ・ダバホ」儀式を行おうとしていることを報告し、守護を祈願している。後ろに跪いているのは、儀式に参加するブォと会衆。写真 22（右）「刀のダバ」を通っているところである。

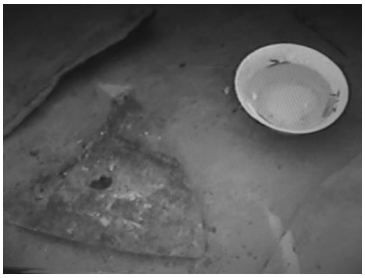

写真 23（左）灼熱した犂とサラダ油。足裏にサラダ油をつけて、犂の上を踏む。

写真 24（右）はその実行である。

写真 25
「ホス・ダバ・ダバホ」儀式の
3 番目に行われたのは、「鏝のダバ」で、熱くした鏝を噛んでいる。首から銅製のオンゴットを入れた袋をかけている。(儀式の写真はすべて、筆者の実妹が撮影)。

写真 26（左）　トランス中のビリグフ・ブォ（2007 年 1 月）
写真 27（右）　ビリグフ・ブォの兄ダムムリン・ブォ（2007 年 8 月）

写真 28（右）　守護霊を招請している高定音ブォ（2007 年 7 月）
写真 29（左）　バト・ブォ夫婦自宅の庭にて（2011 年 8 月）

1999 年から現在まで行われている「ホス・ダバ・ダバホ」儀式の情報は次の通りである。

開催年	場所	主催者	内容	参加人数
1999.10.17（旧 9.9）[19]	ホルチン左翼中旗、ホブル・ブォの自宅	ホブル	1)刃物を踏む、2）火に入れて熱くした犂の上を踏む。3）灼熱の鏝を噛む。	9
2000.8.8（旧 7.7）	吉林省南ゴルロス県 QHA 村（ホブルの弟子の村）	同上	同上	6
2000.10.6（旧 9. 9）	ホルチン左翼中旗、ホブル・ブォの自宅	同上	同上	17
2004.8. 22（旧 7.7）	同上	同上	同上	4
2004. 10.22（旧 9.9）［包龍　2007b：65］。	ホルチン左翼中旗、月亮ブォの自宅	月亮	同上	29
2006.7.31（旧 7.7）	ホルチン左翼中旗、ホブル・ブォの自宅	同上	同上	30 数人
2006.10.30（旧 9.9）	同上	同上	同上	60 数人
2006.7.31（旧 7.7）	ホルチン左翼中旗、月亮ブォの自宅	月亮	同上	39 人
2008.10.7（旧 9.9）	ホルチン左翼後旗、オニソ・ブォの自宅	オニソ	同上	10 人
2009. 6.11（旧 5. 19）	ホルチン左翼後旗、オニソ・ブォの自宅	オニソ	同上	10 数人

[19] 1999 年から 2004 年 8 月 22 日（旧 7 月 7 日）の情報は、［郭淑雲　2008：405 - 421］。

2009. 8.26 （旧 7.7）	ホルチン左翼中旗、白虎・ブォの自宅	オニソ	同上	10 数人
2009.8.26 （旧 7.7）	ホルチン左翼後旗、オニソ・ブォの自宅	白虎・ブォ	同上	10 人
2009. 10.26 （旧 9.9）	ホルチン左翼中旗、白虎・ブォの自宅	オニソ	同上	10 数人
2010. 8.10 （旧 7. 21[20]）	ホルチン左翼後旗、オニソ・ブォの自宅	オニソ	同上	20 数人
2011.6.10 （旧 5.9）	ホルチン左翼後旗、オニソ・ブォの自宅	オニソ	同上	10 数人
2011.6.16 （旧 5.15）	シリンゴル盟東ウジュムチン旗、オニソ・ブォの弟子宅	オニソ	同上	10 数人
2011.8.6 （旧 7.7）	ホルチン左翼後旗、オニソ・ブォの自宅	オニソ	同上	10 数人
2011.8.16 （旧 7.17）	シリンゴル盟東ウジュムチン旗、オニソ・ブォの弟子宅	オニソ	同上	10 数人
2011.10.5 （旧 9.9）	ホルチン左翼後旗、オニソ・ブォの自宅	オニソ	同上	10 数人
2011.10. 15 （旧 9.19）	ホルチン左翼後旗、オニソ・ブォの弟子宅	オニソ	同上	18 人

参考文献

〈日本語〉

江上波夫（池内紀編・解説）1997『江上波夫の蒙古高原横断記』五月書房

エリアーデ（堀一郎訳）

1974a『シャマニズム　古代的エクスタシー技術』冬樹社

1974b（久米博訳）『豊穣と再生』せりか書房

ヴァン・ジェネップ、（秋山さと子、弥永信美訳）1999『通過儀礼』新思索社

[20]旧暦 7 月 7 日に行いたかったが、警察に遠慮して 21 日に行われたという。

サランゴワ 2011「内モンゴル・ホルチン地方におけるシャマニズムの文化人類学的研究」博士論文（2010 年度千葉大学社会文化科学研究科提出）
G・ザナバザル作（解説:N.ツルテム、田中克彦）1990『モンゴルの仏教美術』恒文社
包龍 2007「モンゴル・シャマニズムの復興―ホルチン地方におけるダバー・ダブホ儀礼―」『日本モンゴル学会紀要』第 37 号 pp.61-77
バンザロフ、ウエー・エム・ミハイロフスキー（白鳥庫吉、高橋勝之訳）1974『シャーマニズムの研究』新時代社
ホッパール（村井翔訳）1998『図説　シャマニズムの世界』青土社
楊紅 2009「満州族シャーマンのイニシエーション」『東アジア日本語教育・日本文化研究』（12）pp.157 - 169
〈モンゴル語〉
ゲ・ボヤンバト 1985『モンゴル・シャマニズム概説』内モンゴル文化出版社
ゴワ 2003「信仰習俗の文化」
フルレシャ主編『ホルチン民俗文化研究』内モンゴル教育出版社 pp.561 - 618
スチンムンヘ 2000『モンゴル族祝詞における多層的な文化内容』民族出版社
エルデニ 1997『モンゴル・チャム』民族出版社
フルレシャ、白翠英、ナチン、ボヤンチョゴラ 1998『ホルチン・シャマニズム研究』民族出版社
マンサン　1990『モンゴルのシャマニズム』内モンゴル人民出版社
ロブサンチョイダン 1981『蒙古風俗鑑』内モンゴル人民出版社
〈中国語〉
賀霊
1989a「族源」佟克力編『錫伯族歴史与文化』新疆人民出版社 pp.13-29
1989b「薩満教及其文化」佟克力編『錫伯族歴史与文化』新疆人民出版社 pp.203-347
郭淑雲
2008「東蒙地区蒙古族薩満過関儀式―薩満入巫儀式的個案調査」
孟慧英編『当代中国宗教研究精選叢書　原始宗教与薩満教巻』pp.404-421
孟慧英 2000『塵封的偶像―薩満教観念研究』北京出版社
林河 2001『中国巫儺史』花城出版社
〈参考ウェブサイト〉
雲南旅行網 http://www.km871.net/jnj/index_j06-c.html（2012 年 05 月 28 日）
人民網 http://j.peopledaily.com.cn/94475/6620942.html（2012 年 05 月 28 日）

（さらんごわ・千葉大学特別研究員、慶應義塾大学文学部）

The Initiation of Buu in Horqin Area Inner Mongolia: About "Daba dabahu" (Passing the trial)

Sarangowa

Summary:

These days, shamanism is being reactivated in the Horqin Area. The characteristics are: ① Increase in the number of the newly buus (shaman), especially female buus. ② Increase in the clients seeking the treatment from buus. ③ Growth and revival of the sacrifice rituals. ④ Diversification of the guardian spirits of the buus. ⑤ Revival and growth of the initiation of shaman called "Hoos Daba dabahu" (i.e. passes through two trials). Prior to the 1950s, "Hoos Daba dabahu" ritual was done under the master, characterized as the test when the master and the family acknowledge as a buu. "Yisun Daba dabahu" (the picture passing through nine trials) is the one picturising the worldview of the shamanism in Horqin area and depicted the contents of nine trials; which the Horqin buus emphasized the most. However, it was unable to see after 1950s. The author has blessed with the opportunity to meet an elderly buu who experienced the "passing through nine trials" ritual and got explained about it at the field work. The "passing through two trials" ritual, reviving these days, demonstrates the capabilities of the "passing through nine trials" ritual, and is contributing to the increasing in the numbers of newly buus as well as transmission of the traditional culture.